「封印切」に就いて

千葉新七

(一)

「封印切」とは今更に開き直る必要もなからふ。「梅川忠兵衛」冥途の飛脚」の中の巻で、文樂座にては、最近では、死にましたが土佐太夫や駒太夫の語物であつたので御聞きになつた方が多いであらう、一方、作者が大近松なるが故に、國文の先生方よりもあれこれと俎上にのる代物、作品のかれこれに關しましては何も申しませぬ。先頃、新進の方の——らしい方の——劇評を拜讀仕りました。御手際の悪い事よりは、細い事に恐入りました。何しろ地の利を得てゐる、と申しますのは御住居が上方のようで、事義太夫に關しては、其の凄さ加減は、熱のある所を買つて、牛若丸とでも云ひませうか、慾を云へば品が欲しい、何分にも暗闇の丑松めきます、が兎もあれ、太夫・三味線・人形遣ひに至る迄の御批判は、恰も鞍馬山の大殺陣で、紋下・古老を僧性坊とも鬼一とも頼み、六韜三略には某先生の「虎の巻」を、と見たのは僻目か、その秘文の術を「雁のつばさ」は天狗殿の翼より飛行自在なのには誠に感心仕りました。して、その中に「封印切」の事が、太夫の藝評を云々するに先立つて、講釋が少々述べられてゐるがそれが大事な事です。兼々「封印切」には思ひ立語りの作法のあると存じまするも、我が儘氣儘の書き散らし、紘にのるかのらぬかは御用捨〳〵と前口上は斷り書きで仕ります。まづ、その方の謂ふ所を約言致しますと、近松の書卸から五十年程經て豊竹此太夫が再演して、型を定めた故「封印切」は此太夫風の語物であるとせられ、今日語られる「封印切」の目安を此太夫においた、その事に就いて少々氣になつた。「封印切」の書卸は、通説正徳元年ですから、五十年後とす

ると、寶曆の末年です。「淨瑠璃譜」や「外題年鑑」等は、再演の場合も往々記るせる例なるも該當する記事なく、此等に新資料を加へて集大成をしたと思はれる邦樂年表―義太夫之部―にも見當らない。「封印切」・「此太夫」で思出したのは、かの「胴摺悌人」が、曾て某雜誌に寄せられた、「義太夫虎之卷」の中にあつたようなと胸に浮んだので、早速切拔を出して見ると、はたしてあつた。此太夫風の據所はこんな所らしい。もつとも劇評の著者が、新たに番付なり確實な當時の評判記類を入手せられて此太夫が語つて居るからと云はれれば格別、「虎之卷」に依られたとすると大きな誤りです。「傾城戀飛脚大和往來」「新口村の段」の解說ですが、名人團平の引用話として、

「……前の段を(封印切)、此太夫さんが、アレ丈けの足で一段を纏めて語りヤハリまして、息込みがチヤンと極つて居ますのに、綱はんも若はんも、座を出ヤはつたので、又此の段を(私云ふ新口村の段)此太夫さんが語りやはつたと聞いて居ますサカイ……」

とある。「封印切」と「新口村」を同格な重い語場とした事に注意を要し、上演年月日は安永二年十二月曾根崎新地芝居とある。今日でこそ、近松の原作の儘の外題「冥途の飛脚」を使用しますが、つい近頃迄は、「戀飛脚大和往來」を多く用ひたもので、新口村一段出す時以外にも使ひ、「冥途の飛脚」の上卷(淡路町)、中卷(封印切)に、後年の作たる「けいせい戀飛脚」の下ノ卷新口村を附加したもので、歌舞伎より輸入した外題ではなからうかと思ひます。文化・文政頃より、或はその前かも知れませぬが、同材の曲を一緒に一つの外題で上演する事がままあります。

其の善惡はおいて、興行者の方では、あまり受けぬ語場を拔き足しまへに入れたり、太夫の都合で、聲柄とか格の振合とか、目先を變る爲の時もありませう、筋や人名、地名に多少の無理が生じるのは無論ですが。その場限りの時もあり、それが習慣となつて今日に及んだのもあります。上演時間の關係上と通しを出さぬ今日の文樂座には、少くなりましたが時折はあります。此の「梅忠」なぞは好い例です。周知の曲を二・三あげてみますと、「忠臣藏」では文化九年に、五・六段目の代りに、淺草と植木屋を、――此の時が義太夫での「お蘭の方」の初演のようで、後に「忠臣連鉢植(ちうしんつればちうえ)」と稱して獨立す、歌舞伎種です――入れました。これは此の時限りの例です、講七の喜內を入れたり、二度目の清書の平右衛門物語を入れたり、與茂七住家の段を入れたり、色々義士物を忠臣藏には差加へる事があります。「酒屋」の前には、「艷容女舞衣」が外題ですが、同材の「女舞劍紅楓」の五段目「三勝緣切」を、「加賀見山舊錦畵」の外題で、「廓鳥本」の「花若切腹」や「又助住家」を、「伽羅先代萩」には累の筋が、普通は伊達競―京坂では累物語と稱す―三婦內、身賣り、土橋が、時としては絹川堤が入り、「乘掛合羽」と「道中双六」

を綯交て「梁塵合羽巡中双六伊賀越」としたりし、又、「鎌倉三代記」に「賢女鑑」の十冊目「片岡忠義の段」を、「木下蔭狭間合戦」に、「日吉」の「三段目」を入れた事もありました。言葉を換へて申しますと、「戀飛脚大和往來」なる一貫した作はなく、「冥途の飛脚」と「けいせい戀飛脚」との二作を繼足した外題なのです。それ故、「傾城戀飛脚」（けいせいと假名でなく漢字で書きました後に記るします）なり「冥途の飛脚」なりで近松の方の上・中の巻と戀飛脚の新口村を附加えて一方の外題で出す時もあります。即ち、「大和往來」には時として、大切に「大和路道行の段」といふのがあります。手近の番付・大正三年九月文樂座には斯くあります。東京でも最近やつた事があるのでせうか、五日や三日變りの短期上演故聞洩したかと思ひまするも凡ど演ぜられぬようです。「冥途の飛脚」の「忠兵衛梅川相合駕籠」と同物か、「戀飛脚」には道行がないのですから拵へ物でせうか、兎もあれ大切に道行を附ける時もあります。追出しの幕で、新口村では大切では淋しいし、自然歸り足になるのを止める法——太夫の格を尊重しての事でせう。弘化三年九月「大和往來」の外題では道行が始て大切に附きました「虎之巻」には「傾城戀飛脚大和往來」と長々しくなつてゐますが、「戀飛脚大和往來」が普通です同書には、前記しましたが安永二年十二月曾根崎新地上演とある。これは、「けいせい戀飛脚」の初演の年月日で、外題年鑑には、曾根崎新地芝居、綱太夫・君太夫退座・麓太夫出座とあり、座本豊竹此吉・太夫豊竹此太夫ですから、北堀江座の連中が何かの都合で曾根崎で興行したものと見受ますが當時の番付類が未見なので詳しい事が分らぬのは遺憾です。此作は菅專助、若竹笛躬の合作で上・下二巻よりなり、場割は、上巻・生玉の段、飛脚屋の段、下巻・西横堀の段（羽織落し）、新町の段（封印切）、新口村の段より成立つてます。眼目は下巻ノ切新口村の段と上ノ切飛脚屋の段で、此處では近松の作にない役々が、忠兵衛の嫁のお諏訪、甥の利平——帶屋の儀兵衛型——捌役には梅川の兄の梅川忠兵衛といふ浪人を點出し、八右衛門は敵役として扱はれてます。專助特有といふよりは、むしろ明和・安永の世話物通有の場で嫁の操をたてる事、敵役の金や重寶を誤魔化す事、横戀慕の事など帶屋にしろ大文字屋にしろ、城木屋にしろ、お七とか廓色上とか皆似通つてます。寶暦前後のお家騒動の背景や本筋に關係のない側筋はなく、九段とか十段とか即ち戀女房染分手綱極彩色娘扇・双蝶々曲輪日記類の如き復雜した筋は無くなつてはきました。いづれ「けいせい戀飛脚」に就きましては云々する折もありませうから筋は略します。「新町の段」は場割でも御分りになりますが下の巻の中で輕い場です。而し、これが近松の「封印切」と同文なれば、劇評の方の云はれる通り、安永二年では正德元年より六十年からになりますが、ざつと五十年と大目に見て、團平の話も立つのですが、全然近松のとは仕組みが異なり、歌舞伎でやる大和往來の井筒屋

の場に近く、梅川の親方、槌屋治右衛門の俠氣、金貸由兵衛の治右衛門への居催促より生ずる忠兵衛の封印切、八右衛門が敵役でからみます。八右衛門も梅川を見受けをしようとするが治右衛門は聞きません。

で此の場を此太夫が語つたとしても恐らくは新口村が眼目ですから此處は語らなかつたと思はれますが、近松の「封印切」とは別ですからお合憎様です。では團平の謂ふのは——劇評の方の說は別として——此の新町ではないかと疑はれる方もあらうかと存じますが此の「新町」は近松の「封印切」が復活してからは廢れたらしく、「大和往來」の外題は天保頃より淨瑠璃の外題として使用されたらしく、團平の口調では、「新町の段」が重く扱はれているのから推察しますと近松の「封印切」の事と認められ、それが爲に劇評の先生に間違を傳へた次第です。「新口村の段」こそ安永二年の時の物ですけれど。「封印切」は近松と專助とが別箇なのを誤つたのは、團平でせうか、誤傳を信じ、門弟衆にも此太夫風として傳へたのでせう。此太夫風がいけぬと云ふのではなく「封印切」は後說致しますが復活曲と見なします故、此太夫風であれ、駒太夫風であれ、兎もあれ原作を尊重して上手に演ずればよいので、——現今では正德通りの語方をしろと云ふのは無理な注文で——評をする方の肚が此太夫風といふ先入主があつては如何かと思ひます。もつとも文化・文政の頃復活した「封印切」を更に「團平」が手を入れ此太夫風にしたから、此太夫風の目安で評をなさらうとする、その方はそれで宜しいでせうが、される側から云ふと、團平なり、息のかゝつてゐる門弟衆や連中ならば、團平式に此太夫風に語るでせうが、團平とは全然別交渉な派で語る「封印切」も有り得るのですから、此太夫風一點ばりでは困るし、さりとて、此太夫が再演にしても語り弘めたのなら格別、それでない以上は矢張り習得した語口で演じ度いでせう。

團平は名人でその語を「胴搖悟人」なる、これ又偉い方の筆に書留められたので益々箔が附き、一封印切」のみならず此の「虎之卷」に云々された外題は、玄人筋には實際の「虎之卷」となり、素人衆や評者連中には、こよなき「三略の卷」化しては「獨參湯」と變じ、文樂の紋下が最近演じた「賢十」——賢女鑑では眼目な場ですが日吉の三段目同樣なもので、紋下がわざ〳〵語る可き物でもありますまい、當人の希望か座の方か知りませぬが、目新らしい物を出さうとするのは結構です、教興寺とか是齊內とか三日太平記とかいくらでもありませうに。——此の時も他の方ですが、矢張り標識にせられたようで參考書には至極結構なるも藥の按配は匙加減が第一で御座りませう。

(二)

近松の書卸より大略百拾年たつて今の文樂座が文樂軒の手

で稲荷の芝居興行の時に、文政三年五月で、前「楠昔噺」大序より三段目迄、切が「梅川忠兵衛冥途の飛脚」で、「飛脚屋」・「新町」・「道行」・「新口村」と久振りで出ました。新町を語つたのは染太夫でした。故石割松太郎氏も土佐太夫の文楽座で語つた「封印切」が古風でなく、手の混んで居るのに注目せられ、復活年度を此時に言及し、文政の染太夫か或は其の以後の「冥途の飛脚」である事に疑ひはないといふ説をたてられて居る。此の染太夫は四代目で三世竹本綛太夫の門弟で天明六年閏十月道頓堀東の芝居が初舞臺と稱され、「彦山」の書卸で重太夫（二代目）とあるのは此の染太夫らしく思はれますそうとみて語場は、四段目奥の「山口八幡宮造營の段」と大切の「敵討の場」の掛合でした。文政六年十一月十七日に六十八才で歿しました。逆算すると寶暦六年生れとなり天明六年は、三十一才の時に當り、歿年の九月二十七日初日の千本櫻の二ノ中「渡海屋」と四ノ切「狐忠信皷の段」が最後で舞臺生活は三十八年でした。住所に因んで石屋橋と俗に稱された太夫です。

染太夫名を繼いだのは文化四年正月と年表にあり、本朝廿四孝の通しで染太夫は二の奥（百度參り）、四ノ中（景勝上使）で別に改名の様に思はれませぬ。文化三年十一月三十日に三世染太夫が歿しました。享年は未詳ですが明和五年より其の名竹本座の番附に見ゆとありますから、明和五年として文化三年迄三十九年ばかしになります。天明七年五月竹本座の「安德天皇兵器貢」の二ノ切、三根太夫改竹本染太夫とあるのは三代目の事でせう。歿年の前年文化二年九月道頓堀大西芝居、太夫は豊竹麓太夫で「千本櫻」が大序より四段目迄「切」に「亀屋忠兵衛梶原梅川契情戀飛脚」・「新町」と「新口村」が出ました。「新町」を語つた太夫は重太夫改染太夫とあります。憶ふに三代目が老年なので生前に四代目を襲名させたのではないかと見ます。年表收容の番付が完全でないですが文化元年八月の「大塔宮」の「三段目」竹本染太夫とあるのは三世の御名殘狂言ではないでせうか。尚「千本」では初段の切の口「堀河御所」の端場を語らして、他の太夫との釣合を取らして居ます。此の時の「戀飛脚」の人形役割が詳細なれば斷定し得るのですが合憎と「忠兵衛」・「八右衛門」・「梅川」・「孫右衛門」・「五兵衛」・「忠兵衛女房」とだけしかありませぬ。「忠兵衛女房」と云ふのは年表作製する際に誤つたもので「忠三女房」か「忠三郎女房」で、いづれにしても「新町」には用はなく「新口村」へのみの人名です。「五兵衛」と云ふ名が利兵衛の誤りでなく、由兵衛の誤りでないとしても端役ですが近松のにも專助のにもあります故これだけでは判別がつきませぬ。此の番付も御所持の方が槌屋治右衛門や由兵衛の名があると仰せられれば專助の方ですし、其の名が見えず「鳴とせ」とか「越後女主人」とかゞあれば近松の方といふ事になります。何故戀飛脚とあるにかく疑が生じるかと云ひますと、改名の語物では專助の方では筋を賣る端場に拵へ

てあるので語榮へがせぬように思はれます。近松の方は文句は古風ですから、俗受けは如何と思ひますが、「語出し」「夕ぎりの淨瑠璃」「梅川のクドキ」も充分あります。「けいせい戀飛脚」は安永二年の書卸でも寛政六年の再演でも斯く外題して居るに「契情戀飛脚」と文字を改めましたのも何かそこに曰くがありそうです。續いて文化十三年に「傾城戀飛脚」の外題で新町（富太夫）と新口村とが出で、「傾城戀飛脚」の外題文字は今日に殘つたのです。文政三年に前記の如く、「冥途の飛脚」で淡路町より出した。專助の方の飛脚屋は長丁場なもので、人形役割がないとしても一人で語得る曲でなく、生玉がつき、飛脚屋口・中・切とあれば、疑ひもなく「戀飛脚」ですが「淡路町」（飛脚屋）・「新町」と太夫が一人づゝで語つてれば近松の方です。「冥途の飛脚」と云ふのは近松好みの外題ですが一般には、陰氣な暗い感を與へるので「けいせい戀飛脚」の方が艶がありますが、「けいせい」とひら假名なのでは輕い感じがするので「傾城戀飛脚」と改め、「戀飛脚大和往來」――歌舞伎では寶曆七年七月大阪・大西芝居が初演といふ渥美清太郎氏說、――は天保頃から淨瑠璃の外題に轉用され、明治になりましては此れが一番多く使はれるのは七字外題で大きな感じを與へるからでありませう。最近では、新口村一段だけ出す時は別として淡路町より通す場合には「冥途の飛脚」を使用して居りますので若い方は近松の原作通りと思ひ、文句は上・中同じですが新口村へきて持參の「冥途の飛脚」と文句が異るので變な顏をして居るのを見受けた事もありました。これと紙治の淨瑠璃が好一對です。併し他に名付けようもないので致方もありますまい。逆に、一般の義太夫好きな人々は、「傾城戀飛脚」や「大和往來」は知つてゝも「冥途の飛脚」では梅川忠兵衛と角書があるので梅忠と云ふ事は判りますものゝ首を傾しげる方も見受けます

「近松」の「封印切」を染太夫の重太夫からの改名披露の語物と見ますと、九十年程初演よりの距りがあります。語口や三味線の手が傳はつてゐたとしても舞臺上演では人形の運びや舞臺の模樣が色々あると思ひますから、四代目染太夫が上演の際には何分か節を改めて復活したものと思ひます。その一證として今日の五行本の「封印切」と近松の丸本とを比較して見ますと節付に違ひがあります。實例を以て二・三示します。丸本は十行二十五丁本・五行は版本でなく野村青雲堂の床本に據りました。參考にあげるだけですから、同所・異所のあるような件りを撰びました。節付は活字に寫せるのだけにしました。床本の文句に魯魚の誤りがある事を附加へておきます。

(一)語出しの件り

○丸本

ゑい〳〵鴉（歌ハル）が鳴（引）がな。浮氣鴉（ウ）が月夜も闇（中）も。首尾（ハルフシ）をもとめてあはふ〳〵とさ。あを編笠の。もみぢして

炭火ほのめく夕べ迄思ひ〳〵の戀風や。戀と哀れはたねひとつ。梅がんばしく　松高き。位は〳〵よしや

○五行床本

ゑい〳〵〳〵。鴉がな鴉がな、浮氣鴉が　月夜も闇も。首尾を求めてな。あをふ〳〵とさ。青編笠の紅葉して、炭火ほのめく夕べ迄思ひ〳〵の　戀風や。戀と哀は種ひとつ梅かんばしく松高き位は。よしや

(二)夕ぎりの上るりの件り

○丸本

昔を〳〵今に引きかけて。傾城に誠なしと世の人の申せ共。それは皆ひがごとわけ知らずの言葉ぞや。誠もうそもともひとつ、たとへば命……

○五行

昔を　今に。引かへて。傾城に。誠なしと世の人の申せ共。それはみなひが事譯知らずの詞ぞや。誠も嘘も元ひとつ。たとへば命……

餘談になりますが、こゝは上方唄（地唄）でも「傾城に誠ある文」とて有名な曲で本調子物で、近松門左衛門・近松東南改調と傳へられて居ります。元來が近松の「夕ぎり三世相」中の一節だといふ事は先様御承知であらう。文樂では禿に引語りをさせてますが「私は賴母様の弟子なれば。よふ似た所を聞かしやんせサア」と引き出すのですが禿では生意氣に見えます。梅川の言葉であつて梅川が語るのが至當だといふ説もありますが、前に拳をすゝめられて斷り、愚痴を並べた後で、他の女郎衆が「わつさりと淨瑠璃にせまいか」となるんですから、梅川はじつとしてゐて、他の女郎が、拗くとも豊川・鳴戸瀬・高瀬・千代戸瀬は居るんですから別の女郎と見たいです。一人が語出す。それにつれて他の女郎・禿が語り出し、梅川もつり込まれて小聲でするとしたならば默つて聞いてゐるより人形も手持無沙汰でなくてよいでせう。そうすれば「八右衛門九軒の方より淨瑠璃聞付け。ヤア皆知たよねの聲々」の文句に嵌つてよいでせう。梅川の聲は八右衛門は知つてゐる筈ですから、梅川だけでは變な事になります。故石割氏は「近松は人形といふ事を頭に入れて作を讀返へすと左迄の作者でない。もつとも一人使と三人とは違ふといふ辯明もあらうけれど」とありますが、「封印切」・「女護島」の評ですが、人形の方で、太夫・絃の方でもそうですが、無理な事をせず、小細工的な事をせずに、古風に、應揚にしたら近松の面白い味が出ませう。本調子を二上りにしたのは、華手にしかへたのでせうか。

(三)段切

○丸本

タづけ鳥に別れ行くゑやう榮花も人のかね。はては砂

場を打過ぎて。跡は野となれ大和路や足に。任せて
○五行
夕告鳥にわかれ行。桑曙桑花も人の金。果は砂場を
打過て。跡は野となれ大和路や足にまかせて。出
て行。

以上はほんの一班に過ぎません。

「封印切」の書卸の時に、文中に頼母の名があり、同人の私的生活よりして頼母に此の段を語らせたんだらうと云ふ説が前島氏にあります。

「雁のつばさ」の著者も文中よりして同様な事を言はれてます。いづれも至當であると思ひます。但し、後者は、書出しに歌を、道行の出は謡を使用したのは筑後掾と頼母とを對照させる裏書する一助となるとかありましたが、「書出し」は其の時〳〵に應じて書くものでせうから、それを根據にするとは考へ物です。

以上で憚りなく思つてた事を申しました。

古番付・繪盡・六行・五行の抜本の數々を仔細に研べたら何分か文献的に、はつきりする事が云へませう。近頃、「淨瑠璃」の研究には丸本を云々されますが、側ら、現行の五行本も充分に參考になります。番付・繪盡は見る機會が少いのが殘念です。「封印切」の風とか朱の事に就いては觸れませぬ。唯年代だけですが、今の自分の推定では、文化二年の重太夫改四代目染太夫の襲名披露を復活上演の端緒と見たい。當時の番付を一覽して、それが「けいせい戀飛脚」の新町であるならば別ですが。

（未完）

口傳は師匠にあり
稽古は花鳥風月にあり

豐竹古靭大夫

竹本義大夫師の遺された言葉に「口傳は師匠にあり、稽古は花鳥風月にあり」といふ一句がございます。義大夫節には一段一段御承知のやうに大變むづかしい風格があつて、これが全部口傳に依つて次ぎ〳〵と傳へられていきます。この口傳は師匠を尊敬する事に依つてのみ正しく傳へられるわけですが、後の「稽古は花鳥風月にあり」といふ言葉はまことに滋味のある言葉で、私はこれをかう解釋致します。

語り物が極つてから、さア稽古だといふのではよいものゝ出來やうわけがありません。私共が花鳥風月を愛すのとおなじ心で寢てもさめても稽古を忘れぬといふ心構へをいはれてゐるのではなからうかと存じます。私共の藝道では、凱かないと決して敎へてはくれませんでした。訊くといふ事は疑問を持つたればこその事で、藝の進歩は疑問から生れると申せませう。

十月十一日附「都新聞」所載「藝道探求」より